

2015. 4.2

小原院長の“いま一番気になる人・仕事” スペシャル対談

佐々木美行×小原忠士

平成2年の開院以来、25年間にわたり地元連島を中心に多くの住民の方から信頼を頂き、皆様の健康に貢献してきた小原整骨院。その小原院長が“いま一番気になる人・仕事”というテーマで、ゲストの方と対談をして頂きました。今回は、バンクーバーオリンピックの銅メダリスト高橋大輔選手の恩師である佐々木美行先生に、夢を追いかけることについて語り合ってもらいました。(2015年3月27日(金)ヘルスピア倉敷にて)

その時々自分の目指すものを追っかけていけばいい。

夢は変わっていても良い。

ゲスト紹介

■ 佐々木美行 (倉敷市旭丘小学校)



1957年1月28日生 小学校教諭として勤務する傍ら、倉敷フィギュアスケATINGクラブを立ち上げ監督として20年以上にわたり若手選手の育成に携わってきた。2010年のバンクーバーオリンピックのフィギュアスケート銅メダリスト高橋大輔選手を幼少期から育て上げたコーチとしても有名。現在はスケートを通じて子ども達の人間的成長を促すことに力を注いでいる。

NPO法人岡山県スケート連盟 フィギュア部長、NPO法人岡山県体育協会 理事、倉敷市スケート協会 理事、倉敷フィギュアスケATINGクラブ 監督、倉敷芸術科学大学スケート部 監督、岡山県フィギュアスケート競技 監督。

■ 池上清美 (FM ぐらしきプリティーウーマン パーソナリティ)

1960年 玉野市出身。放送回数が800回を超えるFMぐらしきの長寿番組「プリティーウーマン」の市民パーソナリティをするかたわら、日本女性会議など市民活動にも勤しむ。倉敷女性大学1期生。そこで男女共同参画を学ぶことが転機となり、岡山県女性海外派遣団員としてデンマーク、スウェーデンへの視察がきっかけとなり専業主婦から「私も納税者になろう！」と、様々な経験を重ねる。「転んでもタダでは起きない！」「何か掴んで立ち上がる！」をモットーに、「すぐやる、必ずやる、できるまでやる！」行動力と「笑顔・感謝・思いやり」という人当たりの良さで



株式会社エミリンク (小原整骨院)

Copyright (c) 2014 Emilink.Co.,Ltd. All Rights Reserved.

場の雰囲気盛り上げるムードメーカー。2016年4月から（株）エミリンクに所属。

■ 古閑俊行 (KIT マネジメント 代表)



1970年 倉敷市出身。フリーアナウンサー、MC ナレーター、話し方講師。

平成12年、テレビ朝日アスク（アナウンススクール）に入学。声優、ナレーター、アナウンサー専科を修了。テレビ朝日アスクマネジメントに所属し、司会、パーソナリティ、ナレーション、リポーターを経験。2004年より現在まで、競泳日本選手権場内アナウンサー（アテネオリンピック選考会から）として、現場の緊張感をお伝えしている。平成20年 KIT（ケイアイティ）マネジメント設立。現在は、地元倉敷に帰郷し、司会、CM ナレ

ーション、アナウンスを行っている。

■ 小原忠士 (小原整骨院 院長)



1964年 倉敷市出身。地元である倉敷市連島で開院以来25年にわたり地域の皆様の健康に貢献してきた小原整骨院の院長。柔道整復師としての技術力は当然、その穏やかな人柄で多くの患者に慕われ、スタッフからの信頼も厚い。6月には株式会社エミリンクとして法人設立。代表取締役となる。

■ 司会進行 俣野浩志 (株式会社パッション)

1970年 岡山市出身。一般社団法人ウェブ解析士協会認定 初級ウェブ解析士。経営修士 (MBA: 香川大学大学院地域マネジメント研究科)。大学でマーケティングを学んだ後11年間印刷・デザイン業界に勤務。2009年に岡山県産業振興財団主催のベンチャー・ビジネスプランコンテストにて奨励賞を受賞。2013年大学院にて「住民主体の体験交流型プログラムが地域社会に与える影響についての考察」というテーマで、NPOのまちづくりを研究した。

諦めない気持ちというのは、「自分ならきっといつか出来る」って自分自身を信じて立ち上がっていく力なんです。

司会：今回はバンクーバーオリンピックのフィギュアスケート銅メダリスト高橋大輔選手の恩師である佐々木美行先生と「気まぐれ！メンズトーク」のパーソナリティの古閑さん、アシスタントの池上さんと小原先生の座談会となりましたが…まずは今回の座談会が実現した経緯をお聞かせください。

小原：ご縁があって、佐々木先生と同じ職場の方と知り合って、高橋選手を育てられたコーチがどんなお人柄なのか、是非お会いしたくなりました。

佐々木：そう、同僚のパートナー様から丁寧なお手紙と小原先生のご名刺を戴き、連絡を取らせて頂くことになりました。

小原：佐々木先生と言えば高橋大輔選手を育てたことで有名ですが、たぶん多くのメディアから高橋選手にまつわるエピソードや指導についてはインタビューされているでしょうから、まずはちょっと違った角度から佐々木先生に迫ってみたいと思います。もちろん、他のメディアに出ていない、高橋選手に関する秘話は後ほどじっくりとお伺いしますよ！

佐々木：なんだか、違った角度からというのが怖いですね（笑）。

池上：大丈夫です、みなさん紳士ですから！たぶん（笑）。

古閑：たぶんって！？…。4人も押しかけて威圧感がありましたかね。声が大きいのかか体が大きいのかいいますから…（笑）。

小原：まあ、冗談はさておき。まずは佐々木先生とフィギュアスケートの出会いからお伺いしたいと思います。



佐々木：フィギュアとの出会いについてはよく聞かれるんですけど、幼少期からの夢…みたいなカッコイイものじゃないんで、話としては申し訳ないというか（笑）。大学に進学した時に、何か部活やサークル活動をしたと思ったんです。それで色々見て回ったんですけど、どんなスポーツや活動にしても中学・高校時代からやってる人には勝てないじゃないですか、大学から始めても。それで考えたのが、乗馬かゴルフかスケートだったんです。そこでたまたま出会ったのがスケート部の方で…入学前にもスケートには遊びに行っていたんです、竜のロスケートリンクに。少しは経験があったから、とっつきやすかったんだと思う。

小原：そうなんですね。中学・高校時代からやっている人に勝てないからということは、

株式会社エミリンク（小原整骨院）

佐々木先生はかなりの負けず嫌いですか。

佐々木：ええ、負けず嫌いですよ。特に自分に対しては負けず嫌い。今日もある方のお祝いを買って行ってたんですけど、自分が思っているものがなかなか見つからないんで、何件も回って…。でも決して妥協はしません。見つかるまで探します。意地ですね。

池上：佐々木先生って小柄だし、いつもニコニコしてらっしゃって優しいイメージですけど、やはり負けず嫌いという先生の性格は、メダリストを育て上げたコーチとしての一面でしょうか。かなり厳しく指導されるんですか？

佐々木：昔は、私の車があったら泣きながら帰る子がいるくらい怖かったらしい。最近はコーチとして「優しくなったって」言われるんですよ。以前は、子ども達に厳しくしたらそれ以上に自分にも厳しくしてたんです。当たり前のことですけどね。

子ども達を伸ばしていくのは、厳しさとか優しさとか、そういう部分ではないんです。もっと本質的なことを重視しています。そういう面は昔も今も一貫しています。

小原：それは具体的には？



佐々木：例えば、何かをやり続けることって大変じゃないですか。でも続けられるには何か理由があるはずなんです。その一番のモチベーションになるのが純粋に「スケートが好き！」っていう気持ちなんです。好きなことって、周りから言われなくても主体的に努力するんです。その気持ちが強ければ強いほど、上手に滑りたい、スピンの出来るようになりたい、ジャンプが跳べるようになりたいって思うんです。辛くてしんどいこと

があってもね。私たちコーチとか周りの大人は、その子ども達の気持ちをキチンと捉えて、育んでいかなくてはなりません。

池上：好きこそ物の上手なれ、ですね。昔の人は良いこと言いますよね。子ども達の気持ちをキチンと捉えるというのはコツがあるんですか。

佐々木：そうね。一人ひとりみんな良いところがあるんで、それぞれの長所を伸ばすこと。スケートは採点競技で得点で評価され、記録（タイム）で決着する競技なので、正解はないのです。だから自分が得意なことで得点すれば良い。スピンの好きな子もいれば、ジャンプが好きな子もいるし、滑るのが好きな子もいる、スピンの好きな子はスピンから練習するし…スケートの技とか練習の中でも、それぞれ好きなこと得意なことが違いますから。好きだから得意になるんですけど、苦手なことや嫌いなこともあります。その得意なことや好きなことをつまんで引っ張り上げるんです。そうすると苦手なことも自然とできるようになります。広げたハンカチの真ん中を引っ張り上げると周りも自然に上がってくるイメージですね。

それだけではないんですよ。子ども達が自ら伸びていくためには、自分が成長しているんだ！という実感、できる喜びや達成感があることが大切なんです。そのためには適切な目標と、その目標を達成したという成功体験が必要ですよね。小さな成功体験をコツコツ積み上げていく…努力の仕方ですね、これを教えないといけない。それは大きな夢と、それに近づくためにどういう目標を立てれば良いかなどに繋がっていきますよね。

小原：なるほど、でも挫折する子ども達もいるんじゃないですか？

佐々木：そう！私はそれこそが、スケートを通じて子ども達に経験してもらいたいことだと思っているの。スポーツの世界は100人選手がいたら勝つのは1人だけ、99人は負けるんです。だから負け方が大事なんです。負けた経験から何かを掴まなければダメ。負けたから次の目標はこうしようって、ちゃんと立ち上がって次に繋いで行く。決してくじけない、諦めない。サッカーの本田圭佑選手も言っているでしょう「自分は世界一諦めが悪い」って。諦めない気持ちというのは、「自分ならきっといつか出来る」って自分自身を信じて立ち上がっていく力なんです。転んでも立ち上がっていくのは人生そのもの。私は99人の負ける人にこそ、その経験は素晴らしい経験なのでしっかり活かして欲しいと思っているんです。逆に考えると1番の人は後が大変ですよ、その先を見なければならぬから。



古閑：確かに、優勝は一人だけですね。99人の負ける人のことはあまり考えていませんでしたが…ほとんどの人は負ける側ですね。しかし、諦めず次に繋げていく、自分自身を信じきる力ってなかなか…私たち大人でも…。夢を諦めちゃうわけですよ。

佐々木：夢は大切。夢は諦めてはダメ！というのはその通りだと思うんです。でも、諦めて、やめなくなる時もあると思うけど、それを認めても良いと最近わかってきたんです。諦めたのではなくて、広い意味でいうと夢は続いているんじゃないかって感じるようになったんです。一旦夢を諦めて、脇に置いて、それ以外の他のことを知ったら、もっと違うものに出会うかもしれない、広い意味でいうとそれも夢に繋がっているんじゃないかと…。一つに絞ることもないのではないかなと思うようになりました。夢は変わっていいのです。

小学校6年生の国語の本に「ぼくらのしょうらいのゆめ」というのがあるんですけど、その中で、宇宙飛行士の野口聡一さんが語られたことが載っているんです。その内容がストンと落ちてきたんです。宇宙飛行士になるって、やはり子どもの頃からの夢じゃないですか。野口さんも小学校1年生の時に「ロケットに乗りたい。」と書いたんですね。なので、ずっとそれを目指してきたように取られることが多かったらしいのですが、必ずしもそうじゃなかったんですって。やっぱりいろんなことを考えて、理想も変わっていくし、その時々自分の目指すものを追っかけていけばいいと言われてる。夢は変わっていても良いと…。ちょっとずつ世界が広がっていく中で、具体的な目標って変わっていくじゃない。それは叶う、叶わないとかあるけれど、大きな意味で目標はどんどん膨らんでいく。新しく広がった

世界からは、さらに遠くの景色が見える。そういうのが本当の夢じゃないか。と言われてるんですよ。それを読んでからね、夢は変わって行って良い。前向きにとらえて成長していれば良いと思うんです。

小原：新しく広がった世界からは、さらに遠くの景色が見えるっていうのは響きますね。それは人の成長そのものですよ。人は成長するにつれ、環境が変わり、社会との関わりが広がり、また深まり、どんどん関心の輪も影響の輪も広がっていきますよね。夢や目標が変わるといえるのは、それを促進するのかもしれませんがね。それに、ひょっとすると自分が登ろうとしている山ではない、隣の山が自分本来の力が発揮できる山かもしれない…。ちょっと視野を広げれば気付いていたかも…ということもあるかもしれませんね。

佐々木：そうですね。一つの事にこだわることは素晴らしいことだけれど、他にも関心を向けてみることも大切ですね。今スケートに夢中になっている子にしても、アスリートを目指すだけが夢ではないと気づくかもしれない、スケート教室をしたって夢が変わるかもしれないし、トレーナーになろうとするかもしれない。スケートの世界から完全に離れるかもしれない。

池上：そうですね。挫折を経験することによって、多くの学びができますね。その経験がその子の未来にどんな影響を与えるか…。親やコーチはどんなスタンスで子ども達に関わると良いんですか？

佐々木：夢は子どものものであります。親やコーチはその夢を子どもと完全に共有することはできないんです。子どもがやりたいと思っていることをサポートするだけです。もしスケートで挫折したとして、続けるのなら続くようにサポートするし、やめて新しいことにチャレンジするなら、それをサポートする。それは自分で考えなければダメ。親の思うようにコントロールしたり、親の夢を押し付けたりしてはダメなんです。良かれと思ってするアドバイスもね。



池上：良かれと思って…。自ら考えるという機会を奪って、その力が養われるのを邪魔している可能性もあるのですね。

佐々木：そう、子どもがどんな考えを持つとかが、それが世間的には偏っている考え方であっても、その子の考えを尊重してあげて欲しい！って思うんです。

日本人はよく行列に並ぶと言われますよね、あれは協調性バイアスが働いて、みんなと同じことをすると安心感があるからそうするんですよ。違った考えを

持っていて、人と違うことをするにはかなりのエネルギーが必要です。私の知っている子に、高校受験の願書を書かなかった子がいるんです。先生と喧嘩して。それでその子は一年浪人したんです。そんなエネルギーがあったら何だってできるのに…。凄いエネルギーを持っている子だと…普通は折れるから。この子のエネルギーは凄いから、だからお母さんに見守ってあげてって言ったんです。人間は他の人と一緒ではないところに意味があるのだから…。

エネルギーがあれば…やめるエネルギーは負のエネルギーだけど、逆に使ったら凄い力になるんです。いつか自分で起き上がって歩き出せるんです。

小原：エネルギー、情熱や意欲ですね。京セラの稲盛さんが人の成長について言われていましたね、能力×意欲×考え方が大切で、能力や考え方は後から学ぶことができますが、意欲だけは本人が持っていないといけない。意欲のない人間はダメだと…。昔ヤンチャやっていた人間が成功者に多いのも、エネルギーの使う方向が間違っていただけで、正しい方向に使えば、学ぶようになるし、考え方、人間性も変わるんですよ。

池上：佐々木先生は見るからにエネルギーッシュですけど、今も国体に行かれてるんですよ。今季は群馬でしたよね。



佐々木：そう、成年男子の監督で行っています。国体は2連覇していたので、今回は3連覇を狙っていたんですけど…残念ながら今回は2位だった。

池上：成年男子って何歳からなんですか？

佐々木：大学生以上からが成年男子。上限はないです。20代前半の選手が多いですね。選手としてのピークを考えるとそのくらいが限界かな。大輔くんは29歳ですからね。フィギアの競技って1,500mを全力疾走するくらい体力を使うんです。若い頃の大輔くんですえ酸素ボンベが欲しいっていうくらい激しいんです。

古閑：そうですね。羽生選手とかも競技後は肩でハアハア息してますもんね。

佐々木：フィギアってオフがないんですよ。冬季国体が1月下旬から始まって、他の冬の競技の選手が打ち上げをやるかっていう時期には全日本があって…。私の誕生日もその頃なんですけど、もう忙しくて忘れるくらい…。だからしばらく歳取ってないのよ。

小原：いいんじゃないですか、歳をとらなくて。ところで、やはり高橋大輔選手のエピソードも気になるのですが、高橋選手の子どもの時代ってどんな子だったんでしょう？

[この倉敷のリンクは本当に素晴らしいので、倉敷の選手の財産、市民の財産として愛される場所でないといけない。](#)

佐々木：ごく普通の優しい子だったかな。大輔くんは4人兄弟の末っ子で、小さい時は、引っ込み思案で優しいというか性格的に弱い子だったんですよ。それを心配したお母さんが色々なスポーツをやらされたんですって、野球やら少林寺拳法、アイスホッケーとか、でも痛いことや怖いことが嫌いでした。でもフィギアは気に入ったみたい。ここにきたのは8歳のときかな。

古閑：人柄の良さは、テレビを見ていてもわかりますもんね。でもオリンピックに出ると言うくらいですから、負けん気の強さというか、ハングリー精神みたいなものは強くなかったのですか？

佐々木：そうね。それよりも自分のやりたいようにする、という気持ちが強かったかな。だからライバルとかを意識するんじゃなくて、いつもパーソナルベストを目指していくみたいな感じだったんです。

池上：練習とかは熱心だったんですか？

佐々木：そうねえ。気分が乗らないときは全然しなかった。姫路に小学生の大輔くんを連れて練習に行ったことがあるんですけど、全然練習しなくて…もう仕方がないから姫路城に行ってアイスクリーム食べたりしていたら、そこで名古屋の「金さん銀さん」に出会った。このころから金銀には縁があるのかなと…。

古閑：懐かしいですね。100歳の双子の姉妹の。

佐々木：ええ。私、今までに二回メダルを首にかけさせてもらっているんですよ。一回目はソルトレイクオリンピックの金メダリストのアレクセイ・ヤグディンが来たことがあって金メダルを…。2005年に、ここでヤグディンのスケート教室というのを開催したんです。その時にね。私はヤグディンがメダルを取った時のプログラムは大好きだったこともあって、とても嬉しかったのです。そして、二回目が大輔くんの銅メダル。まさか二回もこんな素敵なことが経験できるなんて思いもしなかった。

小原：そうですね。佐々木先生も人生変わったんじゃないですか？



佐々木：ほんとにね。大輔くんに関わって、人生変わりましたね。大輔くんは、誰でも持ち上げるんです。周りの人を引き上げるというか…そういうものを持っている。自分だけが登っていくのではなくて、巻き込まれてしまいます。それに人を決して裏切らない。遠回りのようにみえて実は結果的に、大輔くんのような生き方が豊かな人生になるのではないかって思うんです。大輔くんのこういった素養の原点は、高橋家の挨拶や縁を大切にするというDNAにあるんじゃない

かって思います。小さい頃からよくご両親に言われてましたからね。それに大輔くんは4人兄弟の末っ子なので、可愛がられ方はよく知っているんです（笑）。だから周りは何かしてあげたいって気持ちになるんですよ（笑）。

池上：わかります。家庭でもらった愛情は、社会に出ても愛情をもらえますね。

小原：なるほど…。周りの人に可愛がられる素質というのは、羨ましいですね。佐々木先生の夢というか今後の目標は？

佐々木：大輔くんのおかげで、フィギアスケートが日本中で愛されるようになり、雑誌などのメディアに取り上げてもらえるようになったんです。私自身が広告塔的な立場で、このリンクをしっかりPRしていきたいんです。この倉敷のリンクは本当に素晴らしいので、倉敷の選手の財産、市民の財産として愛される場所でないといけない。そういうことになるような活動もしっかりやりたいと思っています。

古閑：そうですね。通年で滑れるリンクも少ないでしょうし…。選手の育成とかは。

佐々木：自分が育てた子が指導者となって選手の育成をしてくれると思います、引き継いでくれて…。

まずは情報提供をして理解者を育てたいし、楽しい体験をするチャンスを増やしたい。体験レッスンもしているんですよ。無料体験もありますし。もっとスケートの楽しさを知ってもらいたいですね。

小原：ですね。倉敷をスケート王国にしたいですね！

今回佐々木先生には、この対談だけではなく、FM 暮らしき「気まぐれ！メンズトーク」への出演も予定していますので、また番組の方でも色々とお聞かせください。

佐々木：今回、こういった場を設けて頂けたことに…小原さんに感謝しています。ありがとうございました。

小原：こちらこそ、ありがとうございました。

池上：本当にそうですね。佐々木美行先生から直接お話を伺うことができ、とても貴重な経験になりました。ありがとうございました。

古閑：楽しかったです。ありがとうございました。

.....

■ 倉敷フィギュアスケートクラブ

活動拠点：ヘルスピア倉敷

〒712-8001 倉敷市連島町西之浦4141 TEL：086-444-0887 FAX：086-444-0889

<http://www.sid-soken.jp/healthpia/icerink/index.html>

■ 小原整骨院（本院）

〒712-8014 倉敷市連島中央 2-3-22 TEL&FAX：086-444-9595

受付時間

受付時間	月	火	水	木	金	土	日
8:00～13:00	○	○	○	○	○	○	×
15:00～19:15	○	○	○	×	○	×	×

こはら鍼灸整骨院（倉敷分院）

〒710-0003 倉敷市平田 615-1 TEL : 086-486-3363